

共同研究の経緯と概要

水上雅晴

1. 目的

本共同研究の目的は、本館所蔵廣橋家旧蔵記録文書典籍類の中、年号勘文に関わる資料（以下、年号勘文資料）を中心に研究を進め、資料活用の基盤を整備すると同時に、これらの資料群を活用して中世期における紀伝道諸家の政治・学問・文化・思想の諸分野に関わる研究を進展させることである。紀伝道に属する家に注目するのは、年号勘文の提出資格が紀伝道に属する五家、すなわち菅原氏、大江氏、藤原氏南家・式家・北家日野流に限られていたからである。廣橋家は藤原氏北家日野流に連なり、「改元定は朝廷の重事」（『古事類苑』）と称される朝議に年号勘者や参仕公卿として鎌倉時代前期から江戸末期に至るまで参与し続けている。年号勘文資料が廣橋家旧蔵記録文書典籍類と称されるコレクションの相当数を占めるのも自然なことである。

年号勘文資料に対するこれまでの研究は、主として日本史の研究者によって担われてきた。年号勘文に新年号を決めるための年号案とその出典となる漢籍の文章が記されていることに鑑みると、中国の思想や文学、あるいは漢籍の研究者に関心を持たれてもおかしくないが、それらの方面からの研究が活発になされてきたとは到底言えないのが現状であ

る。本共同研究では年号勘文資料を日本における漢学・漢籍の受容をたどる上での有効な資料と考え、中国学を専門とする研究者を中心に研究組織を構築し、(1) 年号勘文資料に見える漢籍引文、(2) 年号決定のプロセス、(3) 年号と術数思想の三項目に重点を置いて研究を進めることにした。

各項目について説明すると、(1) については、年号勘文が平安時代から江戸時代まで提出され続けたことから、そこに記されている典拠の引文を調べ、さらに訓点にも留意することから、その時々々の漢学の受容と漢籍の流通の状況を詳細に把握する。(2) については、廣橋家旧蔵記録文書典籍類には、多くの関連資料、その中には改元定に参加した公卿の自筆資料までもあるので、それらを活用して年号勘者の事前の準備や参仕公卿の討論の状況を含め、年号が決まるまでの過程に対する理解を深める。(3) については、十世紀以降、辛酉革命・甲子革命の年になると六十年ごとにほぼ例外なく改元され続けたことは日本にしか見られないユニークな現象であるが、この革命・革命改元の理論的背景には中国の術数思想があるので、術数学の観点からの研究を進める。

以上の研究と並行して、年号勘文資料を使いやすい形にして提供する資料整理もおこなう。年号研究は、日本のみならず東アジアの思想・言

語・学術・政治などの諸領域にも関連するが、本研究組織を構成する研究者が各自の専門分野を生かした調査と考察を進めることで、年号研究の新たな展開を支えるプラットフォームが形成されることが期待される。

2. 経過

二〇一五年度

〔研究会・調査〕

①準備経費による事前研究会 15年3月25～27日(国立歴史民俗博物館)

25・27日 廣橋家旧蔵記録文書典籍類の中、年号勘文に関わるものを調査。

26日 研究会(打合せ会議)を実施。「1. 研究計画策定の背景」「2. 廣橋家文書の特徴とその調査」「3. 研究方法と着眼点」「4. 研究組織と役割分担」「5. 研究組織としての研究成果(予定)」「6. 学術的意義と補足」の六項目に関して研究代表者が説明し、今後の研究の方向性と作業内容、役割分担について協議。

②第1回共同研究会 7月10～13日(国立歴史民俗博物館)
10～11日・12日午後・13日 廣橋家旧蔵記録文書典籍類の中、年号勘文に関わるものを調査。

12日午前 研究会
(研究報告)
石井「『廣橋家記録類目録』から判明すること」
高田「日野一流と年号勘申―『迎陽記』を手がかりにして―」
水上「廣橋家の年号勘文資料について」

※石井報告は、国立公文書館で発見した『廣橋家記録類目録』が年号勘文類を含む廣橋家の記録類の伝承過程をたどるのに極めて有益な資料であることを指摘。高田報告は、廣橋家と関わりが深い藤原北家日野流における年号勘申の状況について論じた。とりわけ着目すべきは、年号勘

文に引用される漢籍の解釈を定める際、依拠する注釈に交替が見られることであり、この問題を掘り下げた調査・考察が期待される。水上報告は、廣橋家による年号勘申の状況を整理する一方、廣橋家の記録によって、年号勘文研究の基礎資料たる『元秘別録』の欠落部分を補うことができることを指摘。

12日午後 打合せ会議。以下の事柄について協議を実施。

(a) 計画の実施内容と分担・研究メンバーが各々専門に近い領域に関わる研究を担当する。

(b) 解題目録と翻刻・解題目録は『田中穰氏旧蔵典籍古文書目録 古文書・記録類編』等の体裁に倣う。目録と翻刻の対象文献および底本を決めるには、さらなる予備的調査が必要であり、その結果を受けて分担等を決める。

(c) 館内および館外調査について・当面は館内資料の調査を優先し、必要に応じて館外資料調査の実施もおこなう。

(d) 国際学術シンポジウムと資料展示・二〇一七年度に実施することを決める。

(e) 論文集・シンポジウムで発表された論文を中心に編輯し、二〇一八年度に刊行する。

③第2回共同研究会 16年3月28～30日(国立歴史民俗博物館)

28・30日 廣橋家旧蔵記録文書典籍類のうち、年号勘文に関わるものを調査。

29日 研究会

(特別講義)

小倉「古代・中世文書史料と年号」

(研究報告)

福島「『大唐陰陽書』の伝来と北条貞時の改暦への関与について」

近藤「田中穰氏旧蔵典籍古文書『周易』の装幀と訓点」

石「古代中国年号研究及文献」

水上「年号勘文資料の継承・発展」

※特別講義は、研究グループの大半を中国思想方面の研究者が占め、年号勘文史料に関連がある日記類を含む日本の文書史料に関する基礎知識が全般的に不足しているため、この方面の知見を深めるために実施したものである。本講義を通して有益な知見を得ることができた。研究発表における福島報告は、延慶度の改元を中心に、改元と曆書の関係、および改元をめぐる公家と武家の間のせめぎ合いについて詳論。近藤報告は、田中穰氏旧蔵典籍古文書『周易』（重文）が現状の形態に至るまでの経緯や施されている訓点の特徴について、多くの画像資料を提示しながら、これまでの調査・考察にもとづく知見を示した。同報告に関しては、石井による現物に即した補足説明が翌日午前になされた。石報告は、中国における年号研究の状況や関連資料の刊行状況について解説。水上報告は、『元秘抄』『元秘別録』などが高辻長成によって一旦完成された後の増補の状況について、書き入れにもとづく考察の途中経過を示した。

〔研究発表〕

① 国際学術シンポジウムでの研究発表 8月21日（京都大学）

京都大学文学部にて開催された「経学史研究の回顧と展望―林慶彰先生栄退記念」国際学術シンポジウムに水上が参加し、「日本年号資料中 有関経学的記載与紀伝博士家の学問…以廣橋家旧蔵書為考察中心」と題する研究報告をおこない、主として儒家經典の受容・解釈史の観点から、廣橋家の年号資料と紀伝博士家の学術との関わりについて論じた。

② 国際学術シンポジウムでの研究発表 12月19・20日（上海師範大学）

石が上海師範大学にて主催した「西域と東瀛…中古時代經典写本 国際学術シンポジウム」に、高田と水上が参加した。高田は「日本中世『論語義疏』受容史初探」と題する論文を発表し、皇侃『論語義疏』の受容

史を論じる中で、国内に伝わる写本のテキストと年号勘文資料との関係に説き及んだ。水上は「浅論日本国内抄写和伝承的漢語經典文本」と題する主題報告 (keynote speech) をおこない、日本の古代から中世における儒家經典の受容史を概括した上で、その中における廣橋家の年号資料の位置づけについて論じた。

二〇一六年度

〔研究会・調査〕

① 館蔵資料の調査 16年5月6日（国立歴史民俗博物館）

石井・近藤・高田・水上が『改元勘文』（H-63-148）・『改元部類記』（H-63-157）などを含む廣橋家旧蔵記録文書典籍類に属する年号勘文資料、それに重文『周易』を調査した。年号勘文資料については、書き入れ・角筆・白点などに注意しながら調査を進めた。重文『周易』については白点を重点的に調査し、博物館事業課専門職員の勝田徹氏の協力を仰ぎ、白点の撮影方法について実験・議論した。

② 館内外所蔵資料調査と第三回研究会 8月15～21日（国立歴史民俗博物館・国立公文書館・東京都立図書館）

15～17日は、館内において石井・近藤・高田・廖海華（北海道大学大学院）・水上の五名で、『改元部類記（猪隈関白記）』（H-63-161）・『改元部類記（三中記・長兼卿記・不詳記）』（H-63-162）を含む廣橋家旧蔵記録文書典籍類に属する年号勘文資料について、書き入れ・角筆・白点などに注意しながら調査を進め、これらに関するデータを入手。

18日は「年号の境界」をメインテーマとする第三回研究会を実施し、石井が「入唐僧の場合」、水上が「琉球王国の場合」のサブテーマを立てて研究報告をし、それらの報告を受けた討議を実施。20日は国立公文書館（東京都千代田区）、21日は東京都立図書館（東京都港区）にてそれぞれ年号勘文資料に関連する史料の調査を実施。調査の結果、異本資

料などから得られた情報は、廣橋家旧蔵文書記録文書典籍類のかなりの部分を占める年号勘文資料解題目録の作成や資料翻刻の実施の際に活用される予定。

③館内外所蔵資料の調査 9月15～18日（国立公文書館・国立歴史民俗博物館）

15日は、本研究計画の研究成果の一部を構成する年号勘文資料影印本出版の準備を進めるため、石井と水上が国立公文書館内閣文庫所蔵の年号勘文資料を調査。16日から18日までは、国立歴史民俗博物館にて、福島・末永・近藤・高田の四名を加えて、『改元勘文』（H-63-148）・『寛永難陳』（H-63-181）を含む館蔵資料の調査を実施し、『寛永難陳』に角筆を見出した。廣橋家旧蔵文書記録文書典籍類に属する関連資料の撮影をおこなうかたわら、解題目録を作成する準備のために写真帳を悉皆調査することにした。

④館蔵資料調査 16年10月21・22日（国立歴史民俗博物館）

高田と水上が廣橋家旧蔵文書記録文書典籍類の写真帳を悉皆調査する作業を継続。百点あまり調査した結果、標題からは年号勘文に関わる情報が含まれていることを推測することが難しい資料があることが判明した。

⑤館蔵資料調査および研究打合せ 11月6・7日（国立歴史民俗博物館）

6日は、近藤と水上が館内刊行物『歴博』第208号掲載予定の原稿の内容や翌日実施の調査などに関する打合せ。7日は、これまで継続してきた写真帳調査の継続作業をした後、石井・中川を加えた四名が勝田氏（前出）と文書の白点撮影に関する実験及び相談。その後、写真帳を中心とする館蔵資料の調査。調査の合間に、次年度開催予定の歴博フォーラム、特集展示、国際学術シンポジウムに関して、水上が小島及び事務担当者と打合せを実施。

⑥館蔵資料調査および研究打合せ 11月25日（国立歴史民俗博物館）

水上が写真帳調査の作業を継続し、年号勘文がある資料の抽出作業をほぼ完了。同日は、次年度開催の特集展示、フォーラム、国際学術シンポジウムの実施計画について、国際企画室会議の事務担当者と、主として予算に関わる部分に関する打合せを実施。

⑦館蔵資料調査および研究打合せ 12月12日（国立歴史民俗博物館）

石井・名和・高田・水上が廣橋家旧蔵記録文書典籍類に属する年号勘文資料調査。調査した書物の中、『改元部類記（実夏卿記・公尚卿記）』（H-63-188）において角筆を確認。調査作業をしながら、次年度実施の展示・歴博フォーラム・国際学術シンポジウムの実施内容について、事務担当者との打合せ結果を踏まえて参加者と相談。

⑧館蔵資料調査および研究打合せ 12月22～24日（国立歴史民俗博物館）

石井と水上の二名で、『改元部類記（実夏卿記・公尚卿記）』（H-63-188）などを調査し、『経光卿記』（H-63-704）に白点と思われる書き入れを見出した。

⑨館蔵資料調査および研究打合せ 17年2月5～7日（国立歴史民俗博物館）

5日は、石と水上が研究計画における可視的な成果の重要な柱の一つとなる年号勘文資料翻刻・影印出版に関して、出版社との契約内容を含む打合せを実施。本書の出版に注力するため、解題目録の編纂作業は中止することに決定。

6日は、高田を含む三人で、『元秘鈔』三冊（H-63-186、H-63-187）と通行本（群書類従本）とのテキスト比較を中心とする調査。国際学術シンポジウムに関する打合せを事務方と実施した後、会場の下見をして会場の規模や構造、設備の確認。7日は、文献調査を継続するかたわら、大川（当時は吉野作造記念館館長）と特集展示の準備のために展示会場を回り、展示の具体的な内容や陳列方法、当面優先的に進める作業に関して相談。

⑩館内外所蔵資料調査と第四回研究会 3月27～29日(国立歴史民俗博物館)

27日は第四回研究会を実施。参加者は、福島・石井・名和・末永・近藤・石・高田・尾留川の七名。研究代表者の科研分担者小幡敏行(横浜市立大学)と鶴成久章(福岡教育大学)もゲスト参加。研究会では、末永によって革暦資料の『兼良公三革説』に成立に関する研究報告がおこなわれた後、打合せ会議において次年度実施の特集展示を含め、研究成果の可視化に関わる部分について取り決めがなされた。館蔵資料調査は、『兼仲卿記』(H-31804)を含む12点を対象として進め、これまで気づかれていなかった白点を見出すなどの成果を得た。

〔研究発表〕

①国際学術シンポジウムでの研究発表 16年4月19・20日(香港バプティスト大学)

香港バプティスト大学にて開催された国際『尚書』学第四回学術シンポジウムに水上が参加し、「日本年号資料中的『尚書』」と題する論文を発表。廣橋家旧蔵記録文書典籍類に属する年号勘文資料が『書経』のテキストを研究する上の価値を論じる。同会議には、石も参加していたので、年号資料影印出版事業について打合せを実施。

②国際学術シンポジウムでの研究発表 6月23・24日(台湾師範大学)

台湾師範大学にて開催された「二〇一六跨文化視域下的儒家倫常・政道与治道」国際学術シンポジウムに水上が参加し、「年号与日本政治和學術」と題する論文を発表し、年号が日本の政治・學術に及ぼした影響について論じた。

③研究打合せ会議と学術会議への参加 9月2～4日(京都大学)

2日と3日の二日間、京都大学人文科学研究所一階セミナー室にて、打合せ会議を実施。参加者は、武田・石井・名和・近藤・高田・水上。

2日に実施した打合せ会議においては、次年度実施予定の特別展示と国際学術シンポジウムに関する相談、目録・翻刻作成の方法と分担について話し合われ、会議の中では、水上が年号研究の基礎資料となる『元秘別録』全七冊のデータ入力(八万字程度)を済ませており、それをグループ内で共有することで、今後の研究の進展と深化が期待されることも報告。

3日は、武田が主催し京都大学人文科学研究所四階大会議室にて開催された「中国近世学術文化国際ワークショップ」と題する学術会議、4日は、同じく武田が主催した伝統医療文化研究会にそれぞれ参加し、廣橋家の学術・政治活動に関わる文献学および伝統思想に関連する知見を蓄え、二つの会議に参加していた研究者と情報交換をおこない、次年度開催の国際学術シンポジウムへの参加を打診した。

④市民講座での研究成果の紹介 9月25日(神奈川県立金沢文庫)

金沢文庫で開催された講座「国宝を学ぶ」において、福島によって「鎌倉幕府の延慶改元・改暦への関与について」と題する研究報告が一般参加者になされ、未解明の部分が少なくない幕府からの改元に対する関与について実態解明を図った考察の内容が披露された。

⑤国際学術シンポジウムでの研究発表と打合せ 10月25・26日(上海師範大学)

石が上海師範大学にて主催した「写本時代の經典」国際学術フォーラムに水上が参加し、「日本年号資料中的漢籍鈔本」と題する研究報告をおこなった。日本に伝わっている儒家經典の古いテキストを概観した上で、廣橋家の年号資料がその中で占める位置について論じた。会議開催期間中、石と上記の年号勘文資料の影印出版計画について、出版社、収載書、タイトル、総ページ数、分冊の冊数、各分冊の編集担当者、出版予定時期(翌年十月)等々について、細かい打合せもおこなった。

⑥学会での研究発表 17年1月29日(和光大学ポプリホール)

水上が公益財団法人無窮会の一月例会において「年号と日本漢学」と題する研究報告をおこない、年号勘文所載の漢籍、とりわけ儒家経伝のテキストの状況と価値と問題点に検討を加えた上で、年号勘文に関連する資料に対する研究の可能性について論じた。

二〇一七年度

〔研究会・調査〕

①館蔵資料調査および広報連携センター会議への出席 17年5月9日
(国立歴史民俗博物館)

水上が本年度開催の歴博フォーラム「年号と日本の文化」の準備状況に関して報告。その後、十月に実施予定の国際学術シンポジウム「年号と東アジアの思想と文化」の準備に関する調整を館内事務担当者とおこなった。さらに「元号字拳難」(H-63-124)など館蔵資料の調査も実施。

②館蔵資料調査および研究打合せ 5月31日・6月1日(国立歴史民俗博物館)

石井・近藤・石・高田・水上の五名が「改元定申請」(H-600-1023)ほかの館蔵資料を調査。調査は、9月に開催する特集展示「年号と朝廷」に展示する資料の選定も兼ねて実施され、合間に展示および歴博フォーラムに関する相談も実施。

③資料調査および研究会と打合せ 7月7～10日(国立歴史民俗博物館、都立中央図書館、東洋文庫)

7・8日は、館内で資料調査と研究打合せを実施。資料調査は、主として開催時期が近づいた特集展示に使う資料に関わるものであり、「太平記絵巻」(H-600-27)、「年号勘文他二十通」(H-600-201)などを熟覧調査。調査した内容を踏まえて、展示内容と方法に関する打合せ会議も実施。参加者は、石井・大川・小島・近藤・石・高田・福島・水上の八名であり、小幡敏行(前出)もゲスト参加。調査と打合せに関する記録

の補助者を吉田勉(北海大學大学院博士後期課程)につとめてもらう。長時間にわたる打合せを通して、陳列資料と範囲、配列、それに展示に使うパネルやキャプションの文章作成の割り当てが決まった。8日午前には福島による研究報告と討議がなされた。

9日は、石井・近藤・吉田・水上の四名が都立中央図書館にて年号関連資料の調査を実施。10日は二手に分かれ、石は国会図書館にて年号関連資料の調査を実施。石井と水上は東洋文庫にて廣橋家旧蔵本であり紙背に『元秘抄』が鈔写されている国宝『古文尚書』を調査、白点と角筆を多数見出した。

④館蔵資料調査 7月28日(国立歴史民俗博物館)

特集展示に展示する資料の展示箇所の確認のため、高田と水上の二名が「年号事(靈元天皇宸筆年号備忘)」(H-600-205-3-15)などの館蔵資料調査を実施。

⑤館蔵資料調査 8月17・18日(国立歴史民俗博物館)

展示に使う資料調査を実施。石井が「柳原忠光卿年号勘文 外九通」(H-63-238)ほかの館蔵資料を調査。

⑥展示に関する打合せ 8月25日(北海道大学文学部)

展示パネルのキャプションを作成するため、石井と水上が北海道大学文学部に出張し、近藤と文言の作成作業を実施。吉田勉(前出)が作業の補助をしてくれた。対面で意見交換しながら作業を集中的におこなうことができたので、大半のパネルのキャプション案がその場で完成。

⑦館蔵資料調査 18年2月26～28日(国立歴史民俗博物館)

三日間、水上が館蔵資料を調査。調査した中では、「年号勘文部類」(H-63-210)に特筆すべき事象が確認できた。すなわち同資料の改元記事に引かれている年号勘文の中、一つが年号勘文を集大成した『元秘別録』には収録されていないものであることが判明した。調査の合間に、小島と総合誌『歴博』の年号特集号に掲載する論考・コラムの進行状況

などについて打合せを実施。

⑧ 館蔵資料調査 3月15・16日（国立歴史民俗博物館）

近藤・高田・水上の三名が『研究報告』準備のため、重文『周易』や「年号難陳」(H-63-222) など館蔵資料を調査。

⑨ 館蔵資料調査、第六回研究会および打合せ会議 3月27～29日（国立歴史民俗博物館）

三日間、『研究報告』準備のため、「貞享度改元難陳」(H-600-2053) などの館蔵資料の調査を実施。参加者は、大川・近藤・末永・石・高田・福島・水上の七名。ゲストとして小幡敏行（前出）・鶴成久章（前出）の二名が参加。

28日に開催された研究会では、福島が「鎌倉期の年号勘申者の家と公武政権」、水上が「年号勘文資料と難陳」と題する研究報告をそれぞれ実施。続いて開催された打合せ会議には小島も加わり、三年間の研究成果を振り返り、最終的な報告書として完成する『研究報告』の準備などについて相談をおこなった。

〔研究発表〕

① 学会での研究発表 17年5月21日（京都大学文学部）

石井・近藤・高田・水上の四名が京都大学文学部で開催された第116回訓点語学会研究発表会に参加し、「年号勘文の訓法―廣橋家旧蔵記録文書典籍類の中から―」と題する研究報告を共同で実施。主として、館蔵の「経光卿改元定記」(H-63-203) から知られる年号勘文の訓読法についてこれまでの研究を通して得られた知見を披瀝。

② 国際学術シンポジウムでの研究発表 7月1日・2日（南京大学文学部）

水上が上記学術会議に招待され、「日本中世公卿与漢籍…以年号資料中『難陳』為考察中心」と題する研究報告を実施。館蔵資料の『経光卿改元定記』も利用しながら、「難陳」の記録の学術的価値について論じた。

報告の最後に、特集展示、歴博フォーラムおよび国際学術シンポジウムに関する宣伝もおこなった。

③ 国際学術シンポジウムの開催 10月21・22日（国立歴史民俗博物館）

ガイダンスルームにて国際学術シンポジウム「年号と東アジアの思想と文化」を開催。石井「国語学（書記論）から見た今回の展示」、大川「近世日本における一世一元論」、末永「いわゆる『兼良公三革説』について」、武田「中国古代の曆運思想」、田中「南北朝期日本の年号に関する二、三の問題―公年号・不改年号・私年号―」を含む22件の研究報告がなされた。討議も活発におこなわれ、参加者の一人から、同様の会議をもう一度開催してほしいとのリクエストが寄せられる程の盛会となった。本会議で発表された論考をもとに編集した論文集が商業出版されることが決定。

④ 国際学術シンポジウムでの研究発表 12月2・3日（上海師範大学）

石が主催する「古写本經典的整理与研究」国際学術シンポジウムに高田と水上が招待され、それぞれ共同研究計画に関わる内容の論文を発表。

⑤ 国際学術シンポジウムへの参加 12月22日（北京大學）

北京大學で開催された「古写本經典的整理与研究」国際学術シンポジウムに水上が招待され、「日本年号与経学文献」と題する論文を報告。同報告をもとに作成した論文は、「日本年号資料与経学」と題して『中国典籍与文化論叢』第20輯（鳳凰出版社、二〇一八年）に収録。

⑥ 学術シンポジウムでの研究報告 18年2月21日（二松学舎大学）

二松学舎大学東アジア学術総合研究所主催の「春秋左氏伝と現代の中国学」に水上が招待され、「春秋」と年号勘文資料」と題する研究報告を実施。同論文は、「春秋」と日本の年号」と題して、田中正樹編『中国古典学の再構築』（二松学舎大学学術叢書、汲古書院、二〇二二年）に収録。

〔館内活動の準備・実施、その他〕

① 国際企画室会議への参加 17年7月25日（国立歴史民俗博物館）

水上が国際企画室会議に出席し、10月に開催する国際学術シンポジウムに関して説明をおこなう。会議の中で、研究発表する二十数名の研究者をいくつかのセッションに分け、セッションごとの特徴が容易に分かるようなタイトルを附するべきだという意見が寄せられ、その意見を踏まえてプログラム内容を組み替えた。

② 演示作業と展示替え 9月7日・11日、10月2日（国立歴史民俗博物館）

小島と水上が9月7日と11日に特集展示の演示作業、10月2日に展示替えをそれぞれ実施した。

③ 特集展示の開催 9月12～10月22日（国立歴史民俗博物館）

9月12日から10月22日にかけて、特集展示「年号と朝廷」を開催した。開催初日に水上が、9月23日に石井と近藤がそれぞれギャラリートークを実施。平成が近々改元されることが発表されて年号に関する関心が高まったこともあり、多くの来場者を得て複数の新聞に関連記事が掲載された。

④ 歴博フォーラムの実施 9月16日（国立歴史民俗博物館）

館内大講堂にて第106回歴博フォーラム「年号と日本文化」を開催。研究報告は、所功（京都産業大学名誉教授）による基調報告「日本年号の来歴と特色」に続き、石「中国の年号と予言」、福島「鎌倉幕府の「延慶」改元・改暦への関与」、水上「難陳―朝廷における改元議論の実態」の順で報告がなされた。フォーラムでの報告内容は、【刊行物】（b）01の形で刊行された。

⑤ 「歴博のミカタ」収録 8月19日（国立歴史民俗博物館）

ケーブルネット296で放映される「歴博のミカタ」の中で、特集展示が取り上げられることになり、小島が説明役となった番組が収録された。

3. 成果

三年間にわたる共同研究によって得られた研究成果は、本報告書掲載分を除いても、論文・資料紹介が24点、書籍が3点を数え、研究発表も20回に達した。具体的な研究成果や活動内容については、【刊行物】以下のリストを参照されたい。まずは上記「1. 目的」に提示した項目に即した研究成果の概要を説明する。

（一）年号勘文に見える漢籍引文 平安・鎌倉時代における年号勘文の漢籍引文が宋刊本流入前の古鈔本テキストを反映していて一定の学術的価値を備えていること、ただし鈔写が繰り返される中でテキストの変容を起こしている場合もあることが明らかとなった。これらのことは、（a）01・12において論じられている。年号勘文漢籍引文が原典からの直接引用なのか、それとも他の書物を経由した間接引用なのか、この点について留意が必要なのも明らかとなった。この点については、（a）16を参照されたい。年号勘文と特定の漢籍との関係を論じた論考として（a）24がある。年号勘文およびそれに関連する漢籍に見える訓点に対する研究にも一点の進展が見られた。関連する論考に02と13がある。

（二）年号決定のプロセス 公家と武家との政治関係が変化すると改元プロセスに武家が関与するようになったことは既に明らかになっているが、（a）04と20によって、鎌倉幕府の改元に対する関与に関する研究が深化した。後者の論考によって、廣橋家旧蔵記録文書典籍類に含まれる『経光卿改元定記』の成立背景も明らかとなった。

年号勘文資料に収載されている難陳、すなわち年号案と漢籍引文に対する論難と弁論について言うと、森本角蔵によって「今日から見れば始どとるに足らぬ」（『日本年号大観』）と片付けられており、内容に対する分析はほとんど加えられてこなかった。現代人から見ると詰まらぬことを議論しているように見えても、年号勘文の奏進者とそれを論

難した者にとっては真剣に討議するのに値する問題だったのであり、議論を構成する言語や故実に関わる記述は、日本の思想・学術・政治を論じる上での重要な題材と見なすことができる。この方面に関する論考として(a) 05・11・21・24がある。

(三) 年号と術数思想 この部分については武田と末永を中心に研究が進められ、一定の進展が見られた。改元につながる中国古代の暦運説の数理的側面については、(a) 17において詳論されている。革命・革命の改元定で改元の可否を論じる事前の議論においては『兼良公三革説』に論及されるのが常であったが、本書の資料的性格については検討を必要とする部分がある、という重要な指摘が(a) 15においてなされている。これら以外にも、本報告書には両氏による術数方面に関わる論考が収載されている。

つづいて本研究の成果として刊行された書物について説明する。(b) 02『日本漢学珍稀文献集成(年号之部)』全五冊は、『元秘抄』『元秘別録』を含む年号資料九種を影印し、日本語と中国語の解題を付したものである。(b) 03『年号と東アジア―改元の思想と文化』は、研究計画の環境として開催した国際学術シンポジウムで発表された論文を中心に構成したものである。同書に対して、「本書の多様な内容について各論ごとに詳しく紹介することは不可能」「本書には、様々な問題を東アジア世界のレベルで考える上での多くの示唆が含まれている」(金子修一氏執筆、『古文書研究』第91号、日本古文書学会、二〇二二年)との書評が寄せられる程の充実した内容を備えた多くの論考を収録することができる。以上の出版事業を通して、「年号研究の新たな展開を支えるプラットフォームの形成を目指す」という研究目的はかなり達成できたと考えられる。

本研究に関連して、社会貢献をいくつかおこなった。上記の通り、16年9月25日、金沢文庫で開催された講座「国宝を学ぶ」において福島が

本共同研究の成果の一端を披瀝した。研究成果を研究者に限ることなく一般の人々と共有するために、特集展示「年号と朝廷」を17年9月12日から10月22日にかけて実施した。展示会場で陳列した資料やそれらに附した解説文、さらには二度にわたって実施したギャラリートークを通して、年号勘文資料が持つ学術的価値や面白さを研究者のみならず、一般の参観者とも共有することができた。特集展示については新聞で取り上げられたほか、小島がケーブルネット296の番組「歴博のミカタ」(8月19日収録)において丁寧な解説をおこなった。特集展示と並行して歴博フォーラム(9月16日)と国際学術シンポジウム(10月22日)も一般公開の形で開催し、いずれも多くの参加者を得た。

【刊行物】(研究期間終了後も含む)

(a) 論文・資料紹介

- 01 水上雅晴「年号勘文資料が漢籍校勘に関して持つ意味と限界―経書の校勘を中心とする考察」(『中央大学文学部紀要(哲学)』第59号、中央大学文学部、二〇一七年二月、23～42頁)
- 02 石井行雄・近藤浩之・高田宗平「田中本『周易』(重文)のもう一つの顔―白点調査中間報告―」(『歴博』第201号、国立歴史民俗博物館、二〇一七年三月、20～23頁)
- 03 石立善「中国の年号と予言」(『第106回歴博フォーラム 年号と日本文化』、国立歴史民俗博物館、二〇一七年九月、12～17頁)
- 04 福島金治「鎌倉幕府の「延慶」改元・改暦への関与」(同上書、18～23頁)
- 05 水上雅晴「難陳―朝廷における改元議論の実態」(同上書、24～29頁)
- 06 高田宗平「浅論日本古籍中所引『語義疏』―以『令集解』和『政事要略』为中心」(張伯偉編『域外漢籍研究集刊』第15輯、中華書局、二〇一七年十二月、271～286頁)

- 〔07〕小島道裕「広橋経光「改元定記」と年号勘文―年号を作る会議」（『歴史博』第208号、国立歴史民俗博物館、二〇一八年五月、6～9頁）
- 〔08〕近藤浩之「年号に使われた漢籍」（同上書、11～14頁）
- 〔09〕石立善「中国の測字術と年号の予言」（同上書、15頁）
- 〔10〕高田宗平「年号勘文に引用された佚書―「経光卿改元定記」所引『修文殿御覽』を中心に」（同上書、10頁）
- 〔11〕水上雅晴「難陳―年号を決める議論」（同上書、2～5頁）
- 〔12〕水上雅晴「日本年号資料与経学」（『中国典籍与文化論叢』第20輯、鳳凰出版社、二〇一八年十二月、278～289頁）
- 〔13〕石井行雄・猪野毅・近藤浩之「金沢文庫本『群書治要』移点の意味」（水上雅晴主編、高田宗平編集協力『年号と東アジア―改元の思想と文化』、八木書店、二〇一九年、75～94頁）
- 〔14〕大川真「近世日本における一世一元論」（同上書、393～409頁）
- 〔15〕末永高康「術数の原理―『兼良公三革説』を中心に―」（同上書、597～617頁）
- 〔16〕高田宗平「年号勘文から見た日本中世における類書利用―『修文殿御覽』をめぐって―」（同上書、95～120頁）
- 〔17〕武田時昌「中国古代の暦運説―数理と展開―」（同上書、547～572頁）
- 〔18〕田中大喜「南北朝期日本の不改年号と私年号」（同上書、305～323頁）
- 〔19〕名和敏光「中国出土資料紀年考」（同上書、149～162頁）
- 〔20〕福島金治「鎌倉期の年号勘申者の家と公武政権」（同上書、285～303頁）
- 〔21〕水上雅晴「難陳―朝廷における改元議論の実態―」（同上書、521～544頁）
- 〔22〕石井行雄・猪野毅・近藤浩之「続群書類従 改元関係記事索引」（同上書、左27～35頁）
- 〔23〕高田宗平「国立歴史民俗博物館所蔵『経光卿改元定記 寛元 宝治 建長』―影印、附・略解題―」（同上書、645～685頁）
- 〔24〕水上雅晴「春秋」と日本の年号」（田中正樹編『中国古典学の再構築』、二松学舎大学学術叢書、汲古書院、二〇二一年、59～84頁）
- (b) 書籍
- 〔01〕国立歴史民俗博物館編『第106回歴史博フォーラム 年号と日本文化』全30頁（国立歴史民俗博物館、二〇一七年九月）
- 〔02〕水上雅晴・石立善主編『日本漢学珍稀文献集成（年号之部）』全五冊、4403頁（上海社会科学出版社、二〇一八年一月）
- * 同書の解題担当・近藤浩之「革曆類解題」、末永高康「三革説解題」、石立善「元号六十字之注解題」、高田宗平「元秘抄解題」「迎陽文集解題」、武田時昌「革命勘文解題」、名和敏光「革命勘文解題」、福島金治「迎陽文集解題」、水上雅晴「元秘別録解題」
- 〔03〕水上雅晴主編、高田宗平編集協力『年号と東アジア―改元の思想と文化』全799頁（八木書店、二〇一九年）
- (c) その他の刊行物
- 〔01〕国立歴史民俗博物館編『歴史博』第208号、特集「年号と朝廷」（国立歴史民俗博物館、二〇一八年五月） ※小島・近藤・石・高田・水上が特集記事を寄稿。
- 〔02〕水上雅晴「廣橋家旧蔵文書を中心とする年号勘文資料の整理と研究（歴史博けんきゅう便64）」（『歴史博』204号、国立歴史民俗博物館、26～27頁、二〇一七年九月）
- 〔研究発表〕
- 〔01〕水上雅晴「日本年号資料中有関経学的記載与紀伝博士家的学問…以廣橋家旧蔵書為考察中心」（『経学史研究の回顧と展望―林慶彰先生栄退紀念』国際学術シンポジウム、京都大学文学部、15年8月21日）
- 〔02〕高田宗平「日本中世『論語義疏』受容史初探」（『西域と東瀛』中古時代經典写本国際学術研討会、上海師範大学、15年12月19日）
- 〔03〕水上雅晴「浅論日本国内抄写和伝承的漢語經典文本」（同上）

- 04 水上雅晴「日本年号資料中的『尚書』」(国際『尚書』学第四回學術
研究会、香港バプテリスト大学、16年4月19・20日)
- 05 水上雅晴「年号与日本政治和學術」(二〇一六跨文化視域下的儒家
倫常・政道与治道) 国際學術研究会、台湾師範大学、16年6月24日)
- 06 福島金治「鎌倉幕府の延慶改元・改曆への関与について」(講座「国
宝を学ぶ」研究報告、神奈川県立金沢文庫、16年9月25日)
- 07 水上雅晴「日本年号資料中的漢籍鈔本」(写本時代の經典) 国際學
術論壇、上海師範大学、16年10月25日)
- 08 水上雅晴「年号と日本漢学」(無窮会一月例会、和光大学ポプリホール、
17年1月29日)
- 09 石井行雄・近藤浩之・高田宗平・水上雅晴「年号勘文の訓法―廣橋
家旧蔵記録文書典籍類の中から―」(第116回 訓点語学会研究発表会、
京都大学、17年5月21日)
- 10 水上雅晴「日本中世公卿与漢籍…以年号資料中『難陳』為考察中心」
(第二回南京大学域外漢籍研究国際學術研究会、南京大学文学院、17
年7月2日)
- 11 石立善「中国の年号と予言」(第106回 歴博フォーラム「年号と日本文
化」、国立歴史民俗博物館、17年9月16日)
- 12 福島金治「鎌倉幕府の「延慶」改元・改曆への関与」(同上)
- 13 水上雅晴「難陳―朝廷における改元議論の実態」(同上)
- 14 石井行雄「国語学(書記論)から見た今回の展示」(歴博国際シンポ
ジウム「年号と東アジアの思想と文化」、国立歴史民俗博物館、17年
10月21・22日)
- 15 大川真「近世日本における一世一元論」(同上)
- 16 末永高康「いわゆる『兼良公三革説』について」(同上)
- 17 武田時昌「中国古代の曆運思想」(同上)
- 18 田中大喜「南北朝期日本の年号に関する二、三の問題―公年号・不改
年号・私年号―」(同上)
- 19 水上雅晴「日本年号与經学文献」(經学文献学国際學術研究会、北京
大学、17年12月22日)
- 20 水上雅晴「『春秋』と年号勘文資料」(學術シンポジウム「春秋左氏
伝と現代の中国学」、二松学舎大学東アジア學術総合研究所、18年2
月21日)
- 【その他の學術活動】
- 01 特集展示「年号と朝廷」(国立歴史民俗博物館第三展示室、17年9月
12日～10月22日)
- 02 第106回 歴博フォーラム「年号と日本文化」(国立歴史民俗博物館大講
堂、17年9月16日)
- 03 歴博国際シンポジウム「年号と東アジアの思想と文化」(国立歴史民
俗博物館ガイダンスルーム、17年10月21・22日)
- 公募型共同研究である本研究計画は、国立歴史民俗博物館の小島道裕
教授が、館蔵資料である廣橋家旧蔵記録文書典籍類に関連するプロジェ
クトの受け入れ教員になってくださったことではじめて実行可能となっ
たものである。面識もない水上が提出した研究計画を受け入れただけ
なく、研究組織において副代表者をつとめられ、館内外での調査・研究
活動がスムーズにおこなわれるように常に心を砕いてくださった小島教
授に心からの謝意を表す。館内の各部署のスタッフは、調査・出張・
展示・講演会・国際學術シンポジウムなどの各種の研究活動を実行す
るために多大な協力をしてくださった。一人一人のお名前を挙げることは
できないが、ここに感謝の微意を表させていただきます。
- 上記の通り、研究計画策定当初に予期できなかったほど多くの研究成
果を挙げる事ができたわけであるが、それは本稿末尾に示す研究組織

に加わって下さった各研究者の多大なる協力のおかげである。度重なる調査・研究に関わる様々な活動に遠路を物ともせずに参加し、本研究が基盤を形成し、そして発展するための協力を惜しまなかった各研究者に深甚なる感謝の意を表わす。本共同研究の研究期間は二〇一八年三月で終了したが、報告書をすぐに刊行することができなかったのは、予期せぬコロナ禍の発生も若干影響しているが、最も大きな理由は研究代表者の怠慢である。刊行がここまで遅延したことをお詫び申し上げる。

一つだけ残念なのは、本報告書を研究組織のメンバーの一人であった石立善教授にお見せすることができなかったことである。石教授は、二〇一九年十二月十八日に46歳の若さで亡くなられた。経学すなわち儒家の經典の解釈学の研究者として国際学界において名を成していた石教授は、年号勘文資料にも関心を寄せ、本研究計画の研究成果を対外的に発表するために多大な協力してくださった。日本国内で出版することが不可能と思われる大部な『日本漢学珍稀文献集成（年号之部）』を中国で刊行することができたのは、ひとえに石教授のご尽力の賜である。上海で幾度も国際学術シンポジウムを主催し、研究組織のメンバーを招聘して下さったことで、本研究の成果を国外に発信することもできた。多方面にわたる厚誼と貢献に満腔の感謝の念を捧げる。

4・研究組織

- 石井 行雄 北海道教育大学釧路校教育学部・准教授
大川 真 中央大学文学部・准教授
近藤 浩之 北海道大学大学院文学研究科・教授
末永 高康 広島大学大学院文学研究科・教授
石 立善 上海師範大学哲学与法政学院・教授
高田 宗平 大阪府立大学人間社会システム科学研究科・客員研究員
武田 時昌 京都大学人文科学研究所・教授

中川 仁喜 大正大学文学部・准教授

名和 敏光 山梨県立大学国際政策学部・准教授

尾留川方孝 中央大学文学部・兼任講師

福島 金治 愛知学院大学文学部・教授

小倉 慈司 本館研究部・准教授

田中 大喜 本館研究部・准教授

○小島 道裕 本館研究部・教授

◎水上 雅晴 中央大学文学部・教授

(◎は研究代表者、○は研究副代表者。肩書は最終年度の時点)

(中央大学文学部、国立歴史民俗博物館共同研究代表者)